

相談室の窓

－公立学校の教育相談室から見た中学生の姿－

澤田 敏志

1. はじめに

2012年の夏休みは、次の3件の新聞報道が記憶に残った。

まず、上半期（1～6月）の全国における自殺者数が前年の同時期に比べ11.7%減の1万4154人で、月別統計が発表された2008年以降、初めて1万5千人を下回った。年間自殺者数が1998年から14年間連続して3万人を超えているが、昨年からは減少傾向が見られ、今年は3万人未満にとどまる可能性が高い、という報道である。減少傾向について、内閣府の担当者が相談窓口の充実などの防止対策の効果が始まっているのでは、とコメントしていることも記憶に残る。

次に、全国の警察が摘発した上半期（1～6月）の児童虐待事件は、前年の同時期に比べて62.1%増の248件、被害児童数は55.6%増の252名であり、統計が残る2000年以降、最多であったことを警察庁が発表した。また、警察庁は4月に児童虐待が増加傾向にあることを踏まえ、都道府県警察に児童相談所との連携強化を指示したが、その結果、虐待が疑われるとして警察が児童相談所に通告した児童数は7271人になり、前年より37.7%増加したと報じていた。

そしてもうひとつ。鎌倉市教育委員会が、一学期中に、市内の小学校8校、中学校5校の13校で、いじめが疑われる相談が23件寄せられたことを市議会の教育こどもみらい常任委員会

に報告し、個々の調査結果を次の定例会で報告すると報じていた。

筆者は1983（昭和58）年から4年間、横浜市内の公立中学校（※1）で生徒指導専任教諭を務めた。その間、区生徒指導専任教諭協議会の代表と警察署の少年補導員にも任じられ、少年補導のため夜間の盛り場巡回にも参加した。あれから4半世紀の時間が流れたが、自殺、虐待、いじめと前述の通り子どもを取り巻く社会環境は改善されていない。

そこで、生徒指導専任教諭としての実践を報告し、教員を目指す学生の資料に供することとした。

2. “相談室”の開室

3月に入り、高等学校や専門学校への進学も決まり、卒業記念事業の準備を進めている時に、校長から、次年度から生徒指導専任に就くよう要請された。就任を承諾すると、春休み中に教育相談室を設える工事が始まった。教具置き場として利用されていた教室を半分に仕切り、執務用のデスクや記録保管用のロッカーが購入された。応接の椅子がないので喫茶店を買い取った親戚からテーブルとチューリップ型の椅子を貰い受けて搬入した。これらは、長年、生徒指導の分野で尽力されてきた副校長の努力と、それを支持する校長の理解のもとに進められた。リノリウムの床では寂しいと言ってブルーのカーペットも手配してくれた。壁面も塗

用した。

中に挟み込んだ記録用紙は、多くの同僚から情報を得やすくするため、記録日と記録者の氏名を記す他は、罫線だけにした。この方が生徒の人間関係などを図解したり、事故現場の見取り図を記したりするなど、用いられ方が多様で便利であった。これを資料③として示した。

また、記録の整理は、扉のついたスチール製のロッカーの中にレターケースが備えられている保管庫を用意して貰い、学級単位に分けて収納した。もちろん施錠して管理した。

3. PTA機関誌に掲載したコラム

生徒指導専任の業務は、実にさまざまな事例と直面したが、具体的な事例報告は今後記すことにし、今回は生徒指導専任に就任後、PTAの機関誌に4年間に渡り連載したコラム「相談室の窓」を紹介し、当時の生徒の姿と併せて筆者の保護者への啓蒙活動の一端を報告する。

今回の再掲にあたり、掲載時の誤字や誤った語句については訂正した。

◎相談室の窓 「親の愛を形にあらわそう」

〔昭和58年6月17日（金）〕

「お弁当を忘れた生徒の昼食は教師が購入してやらねばならないのか」ということが先日職員会で話題になった。本校では学校に来たら、下校時までは外に出さない方針なので、忘れた生徒の昼食を教師が買いに行く、ということをやっている現実がある。

「一食ぐらい食べなくても死にはしないヨ」、「食べないでいるのは可哀そうだよ」、「電話をして届けてもらえばいい」……と様々な声が上がった。その中で「空き時間に購入したパンを渡した時の生徒の笑顔に何か救われるものを感じた」という声は教師集団を代表するものと思う。

忘れる理由も様々だろうが、親の愛情あふれる弁当ぐらい子どもを安心させるものはないだ

ろう。中学に子どもを入学させた親の大多数は、苦勞の第一に毎日の弁当づくりを挙げる。給食制度が整っている小学校に比較すれば確かに苦勞なのだろうが、それだからこそ親の愛情の賜物として受け止めることができるのでないだろうか。

私の中学生時代には、上着やズボンの繕いはもとより、下着やシャツまでも母親がつくってくれた。母親の愛がいつも形になって身の回りに存在していたものだ。物の豊富な時代に生まれた子どもたちに何か親としての愛を形にあらわす努力がなされるべきであろう。

◎相談室の窓 「心をひらいて」

〔昭和58年7月20日（水）〕

「先生、つまんネーヨ」

「死にテーほど、つまんネーヨ」

最近ある男子生徒がよく口にするせりふである。休憩時間になるとベランダに出てコンクリートのたたきに腰をおろし、何をしてもなくボンヤリしている姿をよく見る。「何をしているんだ」と声をかけると、前述のせりふが判で押したように返ってくる。

新しい学級になって、新しい級友と日がたつにつれて話題の違いを感じさせられ、精神的に孤立してしまっているのだろうと察する。下校後スポーツクラブに参加しているため、級友と同じようなTVも見られず、共通の話題を探すのに、本人なりに悩み、努力もしたようだ。それでも日々心中に去来するものは、「つまらない」としか受けとれなくなってしまう。能動的に自己の環境を、しかも人的な環境を創り出すことに、何か不足しているものを感じてやまない。現代に生きる子ども達の心に巣食っている共通したもののようにも思える。

中学生になるまでの成育歴を見ると、受動的なことが多すぎたであろう子ども達に、今、中学生時代に能動的に事象を捉え、行動できるよう示唆していかなければならないのでは。

◎相談室の窓 「自ら学べ」

〔昭和58年10月5日(水)〕

毎年60%の生徒が参加している部活動。個人の趣味や特技を活かして新入部員が入ってくるのかと思っていたら、小学生の時から親が様々な情報を集め、あそこの部はこわい先輩がいるから止めなさい、等々の理由で消去され、望ましい部活として認められたところに入ってくるのだという声を聞いた。

途中退部者や日々の活動に参加せず、名前だけの部員が増加している理由もうなずける。対上級生との人間関係を理由に部活を離れていく生徒もいる。同級生間のそれも耳にすることがある。

しかし、自らの趣味として、あるいは特技として選択したのであるなら、すなわち目的意識を明確にして生徒自らに選択させたのなら、そこで生じる問題にもサゼッションやアドバイスは与えても、生徒自らに解決させていくことの方が望ましいと思うのだが。

子どもの問題を親が大人の問題にすり替えてしまい、子どもに自らの問題として捉えさせ、解決する方策を模索したり思考したりする機会を奪ってしまっていないだろうか。子どものギグシャクした人間関係を避けてしまうのではなく、その中でどう解決させるのかを大人として思考し、指導したい。

◎相談室の窓

「見きわめよう己の資質と可能性」

〔昭和58年12月24日(土)〕

「俺なんか行くところがネーヨ」

「私もA校じゃ無理だっていわれちゃった」。

市の診断テストが終わった頃から3年生の個人面談による進路相談が活発になった。肩を落として前述の如く訴える生徒に会うたび「そんなことはないんじゃない。諦めずに頑張れよ」と声をかけるようにしている。

3年生の学級担任の先生方も成績の処理、情報の整理、相談活動、そして先生方同士での情

報交換と、まさに殺人的量の仕事と取り組んでいる。職員室にも何か張りつめた空気を感じる。それ以上に、生徒たちの動揺も感じとれる。

40数名の子どもの将来を思考する努力は、親ばかりでなく先生も大変な苦勞であることは今も変わらない。それにも増して生徒本人の苦勞は“不安”との戦いなのだろうと思う。「今までさんざんあそんでいたのだから…」、「自業自得だよ…」と周りからいわれても、それぞれに自分の力に合ったところ、自分の力を最大に引き出してくれそうなところを選択すべきで、そのための努力を惜しんではいけないと叫びたくなる。

15歳の春が“桜花爛漫”となるためには、まず己の資質と可能性を十分に見極めることが必要ではないだろうか。頑張れ!!

◎相談室の窓 「女らしさの再考を」

〔昭和59年2月13日(月)〕

「早くやれよ!」

「掃除やってください」。

誰の言葉だと思いますか。前者が女生徒、後者が男子生徒の言葉だという。最近2年生を担当している先生方の話題になったことだ。男子をアゴで使う女子。それに対してお願いして歩く男子の班長。戦後、何とかと女性は強くなったというが、教育の場ではそんなことで片づけてしまって良いわけがない。そういえば、朝会や学年集会の態度も女生徒の方が悪い。おしゃべりが多いのだ。他人の話を集中して聴くことができないのだ。髪型も服装も通学のときの布製の袋にしても、靴のひもも、バッグや服に付けている大きなバッジにしても挙げるときりがない程気になることがある。

「女の子だから」ということで、家庭でも学校でも甘やかされてしまい、「甘え」の中にとっぷりつかってしまっているのではないだろうか。やがては妻となり、母になるのであろう彼女らの将来を思うと、けっして明るくはない。

男子の模倣で満足するのはなく、女性でなけ

ればならない良さに気付かせ、社会の半分を担っていることの意義にも十分に着目させたいものだ。ともども「女の子だから」を再考したい。

◎相談室の窓 「ゲタ箱が泣いている」

〔昭和59年3月9日（金）〕

「クツのカカトを踏まない」

「名札をつける」。

これは生徒会校風委員長の二大公約です。本校では安全指導の見地から先生方も上履きはクツにしています。サンダルやスリッパの先生はいません。彼らはクツが小さくなって足が入らないから踏みつぶしているわけではないようです。注意すればちゃんと履けるのです。いわゆる“男の見栄”や“カッコ”なのだろうと思います。新委員長の着眼に感心させられます。

一方、生徒が下校した後の昇降口に目をやると、これもひどいものです。ゲタ箱の外にはみ出ているのやら、スノコに捨てられているクツがあります。玄関はその家の顔みたいなものです。本校の生徒昇降口のゲタ箱が現在の本校を集約したものなのでしょう。教室にある個人用ロッカーの使い方を合わせてみると、子どもの性格も家庭での生活も十分に推察できます。限られた空間をいかに利用するか。そのものの機能を理解したうえで、いかに効用を図るか。これから21世紀に生き抜く人々の共通課題だと思います。

せめて玄関ぐらいは美しく保ちたいものです。

◎相談室の窓 「小さな奉仕活動」

〔昭和59年5月15日（火）〕

「よし、やろう！」

力強いかけ声とともに立ち上がり、各自がホーキを持って掃除にとりかかった。雨上がりのグラウンドのためか、昇降口に靴についた砂で汚れてしまった夕方のできごとである。バスケットボール部男子3年生数名が部長の号令とともに活動し、見る間にきれいにしてしまっ

た。とかく中学生がマスコミに登場し世間の話題をさらう時勢であるが、リーダーの一声でボランティア活動を行うことができる集団があったことは、何か、ホッとした気持ちになった。部活動での上級生と下級生の人間関係が話題になった今年の部活動父母会の成果が確実に実を結んでいるのだろう。

自分たちで使用し後の始末をするぐらいは人間社会の基本的な行為に違いない。にもかかわらず我々大人の社会でも時折「使えばなし」「出しっぱなし」に出くわすことがある。部活動という集団を通して、子どもたちが自らの生活する社会を拡大して考え、行動できるようになることを真に願ってやまない。

大人の姿勢が、子どもの社会に常に投影されていることを、親も教師も、地域全体で真剣に思考する時だと思う。

◎相談室の窓 「小さな一声」

〔昭和59年6月22日（金）〕

「おはようございます」「……………」。

ぼそぼそと「おようございます」の挨拶が聞こえてくる。

週がわりの月曜日の朝なのに、満足な挨拶もできない子どもに不安を感じ、S先生は生徒の実態を探してみた。親と「おはよう」、「いただきます」、「行ってきます」等の挨拶をしているか否かを調べた。すると40名の学級で5名の生徒が、朝起きてから家を出るまでの間に何の挨拶もしていないことが判明した。

日常生活で、なにげなしに繰り返されている基本的なコミュニケーションが欠落してしまっている子どもたちが増えていることに驚かされているばかりではいけないのだが、社会生活の基本であるはずの家庭でも挨拶がなされていない子どもたちに、学校は何をしていったらいいのかと頭を抱えてしまう。

部活動で挨拶を強要することが問題とされた昨年、上級生と下級生の関係改善について指導を行ったが、大きな落とし穴があったことに気

づかされた。

小さな一声が、人間社会の関係をスムーズにし、心と心の交流を図る良薬であることを大人が再確認し、大人からの一声運動の展開を提起したい。

◎相談室の窓 「足跡を見つめて」

〔昭和59年7月20日 (金)〕

「先生、私ワクワクしちゃうのよ。見ているだけでもエキサイトしてしまうわ」

昨今、数人の生徒が1名の生徒に対し、自分たちの日頃のうっ憤を晴らす行為が、特に女子生徒の間にみられる。言葉が、時として暴力以上の心理的圧迫を与えてしまうことに気付いていない。言い争いを見ているだけでワクワクしてしまう子。被害者がそうされることは当然の結果であると容認してしまう子。まさか、いじめていることになるとは思ってもいなかった子。等々と例は多い。

学校帰りに、一人の友達の行為を戒めようとしてエキサイトしたことも、ロッカーの上から友達の背中に飛び乗ることも、友達の中で話し相手にならないよう決めることも、何となく目立つ子をトイレに呼び出して小突くことも、全部が遊びなのである。その子らの多くは「いやなものはいやだし、嫌いなものは嫌いだ」という精神で己を表現しようとしている。けっして立ち止まって足跡を見つめることなどはしない。

原因は他人で結果は私。13年も15年もかかってそのような価値観が築かれたはずだ。じっくり腰を据えて、どう生きることが幸せなのかを語り合う以外に道はないのだと思うのだが。

◎相談室の窓 「ピン ポン ダッシュ」

〔昭和59年10月5日 (金)〕

「ピン ポン ダッシュ」

こんな言葉を耳にしたことがありますか。先日、地域に住む方から「生徒が学校の帰りに玄関のチャイムを鳴らしては逃げ去るような遊び

をしている」との連絡を頂きました。さっそく学級担任から生徒へ指導を行ったところ、ある学級では70%を超える生徒が経験者であることが判明しました。他人の家の呼び鈴を鳴らして、家人が扉を開けて顔を出す前に逃げ去るのが、小学生からの遊びで、中学生では1年生にみられるぐらいだということも判りました。小学生の中学年ぐらいからの遊びですから、男女による別はありません。ほとんどの生徒が少なからずそのような“いたずら”の経験者であると考えられます。

「小さいいたずら」を容認することは、「大きな誤解」を生み出すことであり、更に「大きな誤解」は「人としての軌道からの逸脱」の要因となるのではないかと思います。だからこそ、家庭生活で築かれる価値観が重要なのだと思うのです。

正しい遊びを選択できる子どもを育成するためには、諦めずに、相手が解るまで教えること以外に方策はないと思います。教える方法にこそ大人の知恵が輝くのです

◎相談室の窓 「子どもの見つめ方」

〔昭和59年12月24日 (月)〕

「私は、子どもがいくつになろうとも、子どもの姿が見えなくならないようにして、見ていたいと思う」。これは、地区別懇談会で耳にしたあるお母さんの声です。

子どもの姿が見えなくならないための大人の努力。それは単に子どもが成長して親離れしていく現象をとらえ、つい愚痴をいったり、嘆いたり、諦めたりしてしまう大人になるのではなく、そのような努力を惜しまない大人にならなければいけない、というように聞くことができた。

懇談会、父母会、授業参観、部活動の応援、後援会、体育祭・文化祭の参観、そして相談室への来談と、挙げれば沢山の機会が設けられていることに気付く。教師も父母も、それらの機会をもう一度「子どもが見えなくならない努

力」という観点から捉え直してみてもはどうだろうか。

子どもを盲目的に信ずることは容易であるが、理解することは困難であると思う。あえて困難な道を選ぶ大人の生き方が、子どもに投影されるのではないだろうか。

子どもを見ている限り、知っている振りを止めて、中学生の時期に、しっかり見つめ、そして語り、理解していくことこそが、子育ての基本のように思うのだが。

◎相談室の窓 「15歳の挑戦」

〔昭和60年2月15日（金）〕

「先生！俺うかるかな」

「担任の先生に無理じゃないかって言われたんですけど」、「親と考えが一致なくて昨日ケンカしてしまったんです」

不安そうな顔の来談が1月末になって増えてきた。自己の進路の選択に対する“不安”が否定しきれない程に膨張してしまったようだ。

「あのときにもう少し勉強しておけば…」、「親に言われたときにもっと真剣になっていれば…」という悔いがどの生徒にも共通してみられる。彼らの“目覚め”を大切にして再挑戦も止むなしと思うのだが、現制度下では、そうさせることが全く不利であり、その道すらも確立されていない。

冒険家の植村直己さんも、三浦雄一郎さんも、予想されるあらゆる現象を捉え、万全の準備を整えなければけっしてゴーサインを出さないという。「15歳のチャレンジ」が人生における準備の必要性を痛感できたら“良し”としてはいけないのだろうか。人生80年とも85年ともいわれている今日、もう少し時間をかけて自己の人生を模索しても良いのではないかと思う。自己の速さを知り、それを保ちつつ生きることの幸せをも知って欲しいものだ。

いずれにせよ15歳の春が幸せであって欲しいことは万人の願いである。

◎相談室の窓 「番長」

〔昭和60年3月9日（土）〕

“番長”。毎年のことながら、年度末になると良く耳にすることばだ。小学生の間でも中学校の番長のことが話題になっていることを区内の先生から聞いた。誰が次の番長を引き継ぐのかが興味の中心らしい。二年生の間では、そのためにトラブルが起こることもまれではないという。本校においても自称番長が2年生の中に目立つようになった。

私たちの時代の番長は成績も良かったし、スポーツマンでもあった。それに今と違うのは“勇氣”があったことだ。弱い者をかばうことがあっても、いじめることなかった。仲間をまとめる統率力も十分で、多くの人から慕われ、好かれていた。単に物理的な力が強いだけでは番長になれなかったものだ。

今の番長は寂しすぎる。自分が何に対して突っ張って生きているのか分かっていない。自分の人生を考えることすらできなくなってしまっているようだ。核家族化が進み「子ども社会」を知らない子どもが年々増加している。「大人社会」しか知らない子どもたちに、私たちが体験した「子ども社会」をどう教え、伝えればいいのか迷う。

子ども社会で自然発生した“番長”は、今では形だけが独り歩きしてしまっているようだ。高齢化社会における子どもの幸せを、今考えるべきでは。

◎相談室の窓 「100円ライター」

〔昭和60年5月23日（木）〕

先日、学区内の荒れ地でボヤ騒ぎがあった。原因は子どもの爆竹遊びらしいというので、学級担任から注意を呼びかけたところ、爆竹遊びをしている子どもが何人か分かった。

彼らの話しの中で気になって仕方がないことがあった。それは彼らが何時もライターを所持していることである。A君とB君は家にあった100円ライターをこっそり持ち出したという

し、C君は近所のスーパーで購入したものだという。

家の中に転がっているライターは、ひとつぐらい無くなっても家人は気付かないのだろうか。また子どもがライターを購入する際にお店の人の“モラル”なるものが障害にはならなくなってしまったのだろうか。100円という「安値」と、スーパーという「商法」がもたらした落とし穴なのかもしれない。

我々が子どものころは、マッチひとつでも家人の許可なく手にすることはできなかったし、お店の人もよく知っている人で、買い物に行っても対話があったものだ。

たかが100円のライターぐらいという気持ちを捨てて、子どもにライターがなぜ必用なのかを大人の責任で考えるべきだし、家の中の管理を再考する必要があると思うのは“老婆心”なのだろうか。

◎相談室の窓 「生活の知恵」

〔昭和60年7月12日 (土)〕

先日、団地のエレベーターホールで立ち小便をした生徒がいたとの連絡を受けた。さっそく指導にあたった先生の指示で、当人たちはバケツに水を汲み、雑巾を持って掃除をして来た。彼らの釈明はこうだ。下校途中、団地で待ち合わせをし、友人を待っている間に“ガマン”が限界に達してしまったという。

どうして下校前に用を足さなかったのだろうか。どうして学校に戻れなかったのだろうか。どうして友人宅に出向いてトイレを貸してもらおうとはしなかったのだろうか。

中学生としての“知恵”のなさに驚くばかりである。彼らに「誰も見ていないから」という心理的背景があったとしたら、それは教育による価値基準の形成の誤りだと言っても過言ではない。また「どうせ皆ながやっているのだから」という安易な判断があったならば、それは自ら判断し行動するという社会人としての資質の欠落ではないだろうか。

習うことにのみ慣れさせ、学ぶことを知らなくしてしまった大人社会の責任として捉えることはできないものだろうか。生活の場で必要とされる“知恵”を学びとることを教えねば…。

◎相談室の窓 「盗られた友達」

〔昭和60年10月4日 (金)〕

「だって先生、あの子は友達を盗るんですよ」先日、女子生徒と話していて耳にした言葉である。AとBがともだち、CとDもともだち、そこへEが現れてAとCとともだちになった。BとDは、Eにともだちを盗られたと思い、Eの悪口をクラス内で吹聴し始め、同調した男子生徒のことばやいやがらせがあつて、Eは人間不信に陥ったというできごとを指導していく際、耳にした発言である。

“ともだち”という存在が、単なる“物”と同じように盗ったり盗られたりする対象として感じていることに只々驚いてしまった。

先日、ある会合で、小学校5年生が4人、友達の家に遊びに行き、一人はビデオを見、一人は漫画を読み、一人はゲームをして、それがとても楽しかったと作文に書いた事例の報告を聞いた。

また、人間と対話することができず、機械と楽しげに交流する人間が増加している中で、ともだち、親友ができなくて悩んでいる高校生の相談が多いと青少年センターの職員から聞いた。

人として生まれたことの素晴らしさを、この子どもたちにどう伝えたらよいのか悩んでしまう。

◎相談室の窓 「エスケープ」

〔昭和60年12月20日 (金)〕

「風邪気味で頭痛がするから保健室に行きます」といって教室を出、そのまま行方がわからなくなってしまう生徒。

「風邪で調子が悪いから早退させてください」といって友人宅に行って遊んでいる生徒。

朝は家を出ているのに登校せずに遊んでしまう生徒。いずれも最近の女子生徒の問題行動の例である。

どうしてそんな行動をとるのかと彼女らに聞けば、「だって学校がつまらないから。授業だって面白くない。」ということばが異口同音に返ってくる。家の人が心配するだろうと聞ければ、「かってに心配すればいい。」という。楽しい学級になるよう自分でも努力すればいいと言えば、「もう無理だよ。あの先生嫌いだよ。」と感情をむき出しにする。

自らが住む世界をいつか誰かがつくってくれと信じてしまっている子どもたち。自分の気持ちを本当は誰かに分かってほしいにもかかわらず、上手に自分の気持ちを表現できない子どもたち。

彼女たちの将来は紛れもなく「人間不信」に続く道に向かっている。いったい、今、誰が、彼女らの心を分かってあげることができるのだろう。

◎相談室の窓 「いやがらせ」

〔昭和61年3月7日（金）〕

1月になって、昇降口のゲタ箱に入れておいたクツが、踏みつけられたり、泥だらけにされたりする被害の訴えが2年生の女子から相次いだ。被害者のみならず、多くの生徒から情報を収集し、ついに先日、現場を押さえることができた。

3年生の女子生徒が数名で2年生のゲタ箱を見て歩き、「ひもがついていない」という理由で踏みつけていた。“チョングツ”や“丸チョン（またはデッキ）”は、3年生にだけ許されるのであって2年生が履くのは「なまいきだ。」と彼女らはいう。また、ある部活動では部長が1.2年生の“デッキ”を認めたが、他の部活動では未だ部長が許可していないのだから…。という声も聞いた。更に「アンタは卒リンの対象になっているヨ。」と脅している生徒がいることも収集した情報にあった。

卒業期の上級生のいやがらせは、ここ数年続いていることかもしれないが、その陰湿さに驚く。彼女らの行動の遠因に、学校と家庭間の連絡の不十分な点や、教師間での指導の不一致、更には惰性による生徒への対応も見られ、反省させられることが多い。

つくづく子どもとは大人の姿を見て育つものと改めて認識した。

◎相談室の窓 「飽食の時代」

〔昭和61年5月31日（土）〕

「先生、これを見てください。」と差し出された“おひつ”には、まだ湯気の立つご飯に、醤油・唐辛子・胡麻が丁寧にまぶしてあった。自然教室の昼食時にセルフサービスの食堂で行われた“いたずら”である。

彼らはセルフサービスの“しくみ”を知らなかったという。“おひつ”に残ったご飯は捨てるものだったともいう。3日目の昼食なのだから今更“しくみ”を知らないというのもおかしい。後から食べる人が顔をしかめるのを期待した行為ではなかったのだろうか。

食器洗い場の前で、どんどん捨てられていく残飯。食べこぼしたまま立ち去ってしまったテーブル。あっちこっちに分散してしまった椅子。そんなものを見ながら、何が彼らにそうさせてしまうのかを考えていた。「しつけ」なのか、「教育」なのか。どの場面で、誰が教えてやるべきことなのか。「いたずら」や「知らなかった」で済ませてよいのか。疑問は膨れ上がるばかりだ。

世界一食べ物の豊富な国で生活する子どもたちに、私たち大人が責任を持って教えていかなければならないことは、山積みにされているようだ。

◎相談室の窓 「家 出」

〔昭和61年7月12日（土）〕

「オレ、親とケンカしたんだヨ」

無断外泊をした彼らに原因を問うと、判で押

したように前述の答えが返ってくる。

「親なんて勝手だよ。自分の都合ばかり他人(ひと)に押し付けて」、「オレの気持ちなんかちっとも分かってくれないヨ」。

彼らの言い分に耳を傾けると、きまって理解のない親、身勝手な親を嘆く。

「お前なんか居なくてもいい!」、「出て行け!」のひとを言って、売り言葉に買い言葉で、プンとふくれたまま飛び出してしまう。血肉を分けた親子ですら感情を上手に相互に伝達できずにいる。耐性の乏しい子どもにも大いに責任はあるが、上手に自立させられなかった親の責任は更に大きいと思う。

仕事の忙しさにかまけて自分の子どもの感情をつかみきれなくなってしまった親。親が忙しいことを良いことに、身勝手な行動をとる子ども。因は深い。対等な関係に自らを置くから「叱られた」とは言わずに「ケンカをした」となるのだろう。

精一杯背伸びして大人になりたがる子どもたちに、他人(ひと)を思いやる気持ちの大切さを家族社会で学ばせなければ誰が教えられるのだろう。

◎相談室の窓 「アルバイト」

〔昭和61年10月**日(※)〕

「小遣いがなくなると、ファミコンのソフトを回してもらって友人に売っています」

「もう50本位さばきました」

「ハードの方も専門にさばいてくれる店があって、友人のものを3台ぐらいさばきました」

これは、先日ある事件の事情を聞いている際に耳にしたA君のことばです。わずか1年半ほどの間50本のソフトが売買されたのが事実なら驚異です。近くに住む知人から仕入れて販売したと彼は言っています。商行為上権利無能力者の中学生に商いをさせる大人にも疑問を感じますが、中学生からファミコンのハードを預かって販売してくれる店が存在することにも怒りを覚えます。

子どもは、割合たやすく小遣いを入手できる方法として受け止めていたのでしょうか、ファミコンブームの陰に大人社会の“やらせ”がちらつきます。彼にとって“アルバイト”で片付けられてしまうこと、そして中学生の間で千円単位のお金がやり取りされていることが驚異なのです。

お宅にあるファミコンも子どものオモチャですませるのでなく、前述のようなことも話題に供して、扱い方についても十分話し合っ欲しいものです。

◎相談室の窓 「登校拒否」

〔昭和61年12月20日(土)〕

文部省の実態調査によると昭和60年度の登校拒否は、10年間で3.6倍に増加し、各機関で受けた相談は8千件を超えるという。市の養護教育相談センターでの取扱も400を超えるらしい。

本校においても昭和59年度から急増し、ここ3年の間に20例を数える。学級や部活動におけるトラブル・いじめ・怠けによる休み・病弱・転入学に伴う馴染めなさ・家庭環境の崩壊等々、原因らしきものをあげれば一人ひとり異なるものを発見することができるが、“情緒の不安定”というところは共通する。つまり、登校拒否に陥るきっかけは様々だが、“情緒の不安定”や“心の病”という部分は共通していると思う。その“病”や“不安定”を築き上げてきたものこそが、登校拒否の原因と言えるのではないだろうか。私はいくつかの事例に直面して、彼らは自分の感情をうまく伝えられないばかりでなく、他人の感情をも自分のものとして受け止められないことに気づいた。感情のやりとり障害を持つものが登校拒否に陥りやすいのなら、それはまぎれもなくとりまく大人の責任ではないだろうか。

◎相談室の窓 「マラソン大会」

〔昭和62年3月6日(金)〕

(15) 第5号
永田中PTA広報
昭和62年3月6日(金)

大寒の中で行われたマラソン大会。例年のことながら余力がありながら最後尾を走る一団がいる。自己への挑戦という姿などどこにも見られない。学校が見えなくなるとうおしゃべりをしながらの歩行に変わる。「オリンピックは参加することに意義がある」という名言があるが、「参加することの本来の意味を理解していない姿だといわざるを得ない。しかもそういう姿が上級生になる程多くなる

困難なことではできるだけ避け、安易なことのみに走る傾向を持つ現代少年たちの顕著な例と見るべきなのだろうか。勝敗は別に「参加する」姿勢で負けてしまっている我が子を見たら、親の嘆きは増幅するばかりであろう。

照れやごまかしで生きていける程我々の社会は墮落もしていないと信じたい。この少年たちにごまかしを教えた元凶を知りたい。

昭和58年から四年間に渡って執筆してきました相談室の窓も、私の担当は今回が最後になりました。紙面をお借りしてお別れの挨拶を兼ね御愛読に對しお礼申し上げます。長い間ありがとうございました。



澤田敏志

最終回のもものは、当時のPTA広報誌に掲載された形で示した。

(注)

※1 筆者は1976(昭和51)年4月から1987(昭和62)年3月まで11年間に渡り横浜市立永田中学校に勤務した。30代の後半にあたる4年間、生徒指導専任教諭に任じられた。